

Ch.5 Predicting feelings versus choices.

5. 感情の予測と選択の予測

Van Boven, L., & Kane, J. (2006). Predicting feelings versus choices. In E. C. Chang & L. J. Sanna (Eds.), Judgment over time: The interplay of thoughts, feelings, and behaviors. pp. 67–81. Oxford University Press.

Rep. 小森めぐみ¹.

はじめに

- ・ 私たちはしばしば最善の判断と思われるものに背くけれど、それはあたかも本当の自分ではない別の誰かによって引き起こされているように感じる。今現在の自分にとって、将来の自分の行動を予想したり律したりすることは困難なことが多い。
- ・ これは、現在の自分が必ずしも将来の自分がどう感じるか、どんな意思決定をするかよくわかっていないことから生じる。
- ・ 本章では、感情・選択の予測についてレビューを行う。特に cold な状態(=感情的な喚起がない状態)にいるときに hot な状況についての予測を行う際に注目する。これにより、なぜ現在の私たちが未来の私たちをうまく予想できないか、理解できる
 - 私たちは cold な状態にあるとき、感情の強さと持続時間については過大視するが、感情が選択や嗜好に与える影響については過小視する。二種類の予測には異なる制約・調整要因が存在する。
- ・ さらに最後には今後の研究に向けての3つの課題を指摘する。

Impact bias in predicted feelings

- ・ 人々は自分が今とは違う状況におかれたときにどう感じるかを予測する。しかし予測した感情の強さや持続時間は不正確になりがち。
- ・ 感情的な喚起状態にない人は、感情を生じさせるような出来事の影響力の強さ・持続時間を過大視する (インパクトバイアス)。
- ・ インパクトバイアスは様々な母集団・出来事について示されている。
 - 極端/日常的な出来事、一生に一度の/毎日起きる出来事、個人的/社会的な問題… (Brickman, Coates, & Janoff-Bulman, 1978; Buehler & McFarland, 2001; Suh, Diener, & Fujita, 1996; Wilson Wheatley, Meyers, Gilbert, & Axson, 2000; Sieff, Dawes, & Loewenstein, 1999; Gilbert, Pinel, Wilson, Blumberg, & Wheatley, 1998)
 - インパクトバイアスがあちこちで見られるのは、人々が過去の予測失敗経験から学ばないことが原因。でもそれはなぜか?

インパクトバイアスの原因其の1 免疫無視

- ・ 私たちがネガティブな出来事に遭遇したときには、ダメージを最小限にいとめる“心理的免疫システム”が働く。しかし一方で、私たちはその働きに気づくことができない。このため、私たちは感情を引き起こすような出来事が私たちに与える影響を過大視する。

¹ 一橋大学大学院博士課程.

- ・ この“免疫無視”は心的ディフェンスの作動を調整する文脈要因や、実際に起きた出来事以外の出来事と連合される感情の強さに過大に注目することによっても、より強大になる。
 - 上司から“大学2年生程度の言語能力だ”と言われることは、大学生から同じことを言われることよりも侮蔑的に思える。しかし、心的免疫システムの働きは前者のほうが後者よりも強くなるため、その結果感情反応はどちらも同程度になる。
 - 選ばなかった選択肢は魅力的に思える。しかし、選択肢から一つ選んだ後は、不協和低減が働いて、自分が選んだ選択肢が最善のものに思えてくる。

インパクトバイアスの原因其の2 フォーカリズム

- ・ 感情予測をするときには、感情的な出来事の顕現的（で hedonic）な部分にばかり注目してしまい、小さいながらも影響を及ぼしうるものは見過ごしてしまう（フォーカリズム; Wilson et al., 2000 または フォーカス幻想; Schkade & Kahneman, 1998）。
- ・ 予測するときには今と予測している状況の2つの違いが顕現的になるが、実際に経験しているのは1つの状況(Hsee & Zhang, 2004)。この違いがフォーカリズムを不可避にする。
- ・ 以上をまとめると、人は感情的な出来事が自分の感情に与える影響を過大視する。感情が選択に影響すると考えるなら、人は感情的な出来事が自分の選択に与える影響も過大視するのだろうか...

Empathy gaps in predicted choice

- ・ 私たちは感情的な喚起状態にない（＝ニュートラルな状態）場合に、感情的な喚起状況が選択に与える影響を過小視しがち（hot/cold 共感ギャップ）
 - ニュートラルな状態にある参加者は自分が遭難したら飲み物よりも食べ物を持ってこなかったことを後悔するだろうと答えたが、喉が渇いている参加者は食べ物より水を持ってこなかったことを後悔するだろうと予測した (Van Boven & Loewenstein, 1999)
 - 満腹の参加者はそうでない参加者よりも先のために高カロリーのスナックを選ばなかった (Gilbert, Gill, & Wilson, 2002)
 - 人前ではずかしい芸をするよう依頼されたらどうするかと尋ねられた参加者は、実際に依頼された参加者よりも少ない報酬で依頼に応じるとこたえた (Van Boven, Loewenstein, & Dunning, 2005)

Hot/cold 共感ギャップの原因

- ・ 感情的な喚起は行動に直接影響を与えるが、その影響は意識的に自覚できないことが多い (Bechera, Damasio, Kimball, & Damasio, 1997; Frijda, Kuipers, & ter Schure, 1989; Ledoux, 1996)
- ・ 人はニュートラルな状態での自分の好みは安定していて、実際に喚起状況におかれたときでも変わらないと信じがち (Finucane, Alhakami, Clovec, & Johnson, 2000; Schwarz, 2001, 2002; Schwarz & Clore, 1988; Slovic, Finucane, Peters, & MacGregor, 2002)
- ・ 感情的な喚起の高まりは感情に関連する情報へのアクセシビリティを選択的に直接高め（それ以外の情報へのアクセシビリティを低め）るが、予想しているときにはそのようなアクセシビリティの変化はおきない

Why do predicted feelings and choices differ?

- 感情的喚起が高まる状況が感情と選択に及ぼす影響が逆方向なのは、感情と選択が異なる性質をもつコンストラクトだから
 - 感情：感情的な喚起の現象学的表明 (phenomenological manifestation)
 - 選択：複数の選択肢の中から一つの選択肢を選び取ること。それぞれの選択肢に感情が付随することもあるが、それはその選択肢を選び取るかにかかっている
- 選択は多くの選択肢の中での相対的コスト・ベネフィットに応じて決まるが、感情はそれ自体がコスト・ベネフィットをもつ属性

Choices are intuitively more stable

- 感情的な出来事は、強烈だがその場限りのものと考えられており (Lerner & Keltner, 2000, 2001)、友だちが朝の授業で退屈したあとにランチで満足になってもおかしいとは思わない
- 選択はその反対に、時や状況を越えて一貫したものと考えられている。実際にはそうでないことが今ではわかっているものの (Slovic, 1995; Tversky & Kahneman, 1986; Tversky, Sattath, & Slovic, 1988)、選択が安定的なものという考えは直感的に正しく思える。
- 感情を予測するときには、感情は非安定的という考えの影響で過大視が起きるが、選択を予測するときには、選択は安定的という考えの影響で過小視が起きるのかもしれない

Choices are more dispositional

- 選択や行動は感情と比べて個人の持続的な傾向性との結びつきが強いという信念が存在するのかもしれない。
- 感情の中には傾向性との結びつきが強いもの (=個人差があるもの) も存在するが、基本的には感情は状況に結びついた一時的なもの。
- 感情は外的な刺激の特徴に帰属されるが、選択は状況ではなく選んだ人の傾向性やパーソナリティに帰属される。
- 人々は自己概念や傾向性を維持するよう動機づけられているので (Aronson, 1969; Festinger, 1957; Greenwald & Ronis, 1978; Steele, 1988; Thibaut & Aronson, 1992)、人々が選択と傾向性の結びつきを強いと感じているのであれば、時と状況に応じて選択を変えようとはしない。

Future research

- ここまでの研究はすべて予備的であるので、感情の過大視と選択への影響の過小視の両方を同様の状況で示すことが必要。その際にはタイムフレームをそろえることが必要。
- 今後の展望として、3つの要因を検討していくことが必要。
 - 1つ目は発達の影響。大人になるほど自分の感情や選択は他者とは異なる場合があることがわかってくる (e.g., Bernstein, Atance, Loftus, & Meltzoff, 2004)。異なる状況の自己の予測は他者の予測と同じであるので (Gopnik, 1993; Loewenstein, 1996; O' Connor et al.,

2002; Schelling, 1984)、感情と選択の予測の違いは見られなくなるかもしれない

Cultural differences

- ・ 2つ目は文化の影響。東アジアなど集団主義文化では、傾向性推論はそれほど行われず (Chiu, Hong, & Dweck, 1997)、好ましい自己観を維持させようという動機付けがそれほど働かないために (Heine et al., 2001; Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999) 認知的不協和も感じない (Heine & Lehman, 1997)。
- ・ 個人的な一貫性を維持しようとする動機がないのであれば、感情が選択に与える影響の過小視は生じず、ギャップは小さくなるかもしれない

Different types of affect

- ・ これまでは主に動因を取り扱ってきたが、より高次の感情についてはもっと複雑なプロセスが働くかもしれない
- ・ 動因の影響の方向は一方向 (喉が渴けば水がほしい) だが、感情が選択に与える影響は (たとえベイレンスが同じであっても) その感情がどのような喚起と連合しているかにより異なるだろう
 - たとえば恐怖は怒りと比べて高リスク・不確実性と連合しているため、怖がっている人は怒っている人や喜んでいる人と比べてリスク回避行動をとりやすいかもしれない
- ・ また、感情を推測するときには、推測しているときでもその感情を抱きやすくなるが、動因の場合にはそれが無い (喉が渴いていることを想像しても、実際に喉は渴かない) ことが影響しているかもしれない。

Summary

- ・ 人がどのように感情や選択を予測するのか、これまでにわかっていることは...
 - ネガティブな出来事を“乗り越える”能力を備えていることを、十分理解できていない (Gilbert et al., 1998)
 - 日常生活において目立たないけれども影響を与えている出来事が将来の感情状態に及ぼす影響を十分理解できていない (Schkade & Kahneman, 1988; Wilson et al., 2000)
 - 今好ましく思っていることを、別の状況における行動の予測に投影してしまうこと (Loewenstein, 1996; Loewenstein, O'Donoghue, & Rabin, 2003)
- ・ これまでわかっていなかったこととして、感情的な喚起状態にないときに行う感情予測と選択予測が逆方向に歪むことがあげられる。これは、感情と選択のそれぞれに影響を及ぼす調整・媒介要因の違いが原因と考えられる。
- ・ 最後に、これまでわかったことから一つの教訓が浮かび上がる
 - 心理学者は感情関連の状況における判断や意思決定を研究する際に、架空の物語を使用する。
 - しかし、感情予測と共感ギャップの研究が示すことは、このような状況では人は歪んだ予測を行うということ。実際の感情を考慮したうえでの検討が必要。

